Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

国籍や言語の異なる子どもたちがいる保育の中で考えたこと

－Ｔ子との関わりを通して－

大瀧　知子
（東洋英和女学院短期大学部付属かえで幼稚園／前　聖学院アトランタ国際学校）

森　眞理
（コロンビア大学大学院）

１．問題と研究目的

筆者は、自分が成長してきた過程や保育の現場に携わる中で、人間は、同質のなかま関係の内に安住し、異質の者を排除していく傾向にあることを常日頃感じさせられていた。その傾向は、少子化・知育偏重・遊び場の減少等の日本の子ども環境の現状から、今後ますます高くなっていくことが予想される。「子どもたちが、自分自身をしっかりと持った上で他と関わり、他を受け入れ、共に生きていけるために、保育者としていったい何を為すべきだろうか」ということが筆者自身の以前からの課題であった。

そのような折、筆者に３年間のアメリカでの保育の機会が与えられた。そこには文化・社会・人種等、多種多様の背景を携えてきている子どもたちがいた。　本研究は、特に国籍や母語の異なりに焦点をあて、その只中にいたＴ子（５歳女児）の約半年の経過を振り返ることで、筆者が前述の課題に対して、現段階で見い出せたことを述べると共に、今後のさらなる課題を意識化することを目的とする。

２．Ｔ子をとりまくもの

①場所

聖学院アトランタ国際学校幼稚部

②対象児・期間

1995年度５歳児Ｔ子とＴ子をとりまく3,4,5歳児。

③Ｔ子について

５歳児クラス２学期（1995年９月）より入園。

入園当時５歳７か月。父は日本人。母は中国系アメリカ人。入園前は現地のデイケアセンターに通い、家庭では主に英語を使っていたため、日本語の語彙は少なく、聞き取ることはややできるが、話すことはほとんどできない。

３．調査にあたって

本研究は、日々の保育の記録からの事例を、保育者として主観的・客観的に捉え、記述し、考察するものである。

研究の基点として共同研究者である森眞理による論文「保育の場に一人ひとりが携えてくるものを考える」[1]を置く。

４、聖学院アトランタ国際学校の概要

本校は、東京に本部をもつ学校法人聖学院の一校として、1990年に米国ジョージア州アトランタに設立された。現在は幼稚部・小学部・中学部が置かれ、合わせて百余名の子どもたちが同じ建物の中で生活し学習している。本校は、キリスト教信仰に基づく教育理念に立ち、日本国憲法及び教育基本法等日本国の法令に準拠し、かつそれと矛盾しないかぎり当地の法令を遵守している。対象は、主に当地に駐在する日本人の子どもたちであるが、併せて現地の子どもたちも受け入れ、日本語による日本国の教育制度に基づく教育と、他の世界の人々及びその文化を深く理解する国際理解教育を施すことに努めている。本校は、世界人権宣言及びアメリカ合衆国法修正箇条精神基づき、子どもの受け入れ及び教育に関し、人種・国籍・性別・信条等による差別をしない。

1995年度の幼稚部には37名の幼児が在籍。その内23名は両親共に日本人、10名は父母のどちらかが日本人、４名は両親共に日本人以外（主にアメリカ）の家庭から来ていた。各年齢のクラス担任は日本人であるが、幼児と直接関わりをもつ教職員の中にはアメリカ人をはじめとし、フィリピンやブラジルの出身者がいる。

保育時間は、午前８時30分から午後１時30分までの５時間である。また、その内の約３分の２にあたる時間は、幼児が自発的に場や教材・遊具や友だちを選び、年齢（クラス）の枠を越えて遊びに取り組む時間となっている。

５．Ｔ子の生活

・事例１　　1995年９月11日

片付けの時間になり当日庭の担当であった筆者が屋内に入って来た時、Ｔ子がロッカールームの角で膝をかかえて泣いており、その周りを数名の子どもたちが囲んでいた。筆者が近付くと、子どもたちは困ったように筆者を見上げ、「Ｔちゃん、さっきからずーっとこうなの」「いつもだまっているの」「クリンナップ（ｃｌｅａｎ　ｕｐ）ってえいごでいったのに、なにもいわないの」と、訴えかけるように言う。筆者は彼らに「そう、Ｔ子ちゃんには泣きたくなるような訳があるのだと思うの・・・私が話を聞いてみるからみんなは片付けを始めていてね」と告げ、Ｔ子と二人になる。筆者が、「どうしたの？」「なぜ泣いているの？」と英語をまじえて尋ねてみるが、Ｔ子は何も答えない。筆者はその様子からＴ子にとっては相当につらいことがあったと見とり、ただだまって肩を抱き寄せ気持ちが落ち着くのを待つ。そして、なきじゃくりが止まったことを感じたので「片付けしにいこうか」と誘い、Ｔ子の手をとり立ち上がらせ、一緒に歩き出す。数歩歩いた後、Ｔ子は立ち止まり、筆者の手を強く握り返し「Ｎｏｂｏｄｙ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄｓ　ｍｅ．（だれもわたしをわかってくれない）」とつぶやく。筆者は、再びＴ子の肩を抱き、できる限りの英語の表現を使って「それが悲しかったんだね。私は、Ｔ子ちゃんの思っていることをわかるようになりたい。Ｔ子ちゃんが思っていることが友だちにわかるように助けたい。」と告げる。Ｔ子は静かにうなづき筆者と共にとなりの保育室に行き、他の子どもたちに混ざって片付けを始める。

Ｔ子のことを気にかけていた子どもたちの内、何人かが筆者に「Ｔ子ちゃんどうして泣いてたの？」と確かめに来た。筆者は、関わりのあった子どもたちを集めて「Ｔ子ちゃんは私たちのようにはまだ日本語がよくわからないよね。私たちはＴ子ちゃんのようには英語がよくわからないよね。Ｔ子ちゃんは、みんなの話していることがわかりたいのにわからないことや、自分の思っていることを言いたいのに言えないことが悲しくて泣いていたんだよ。」と告げた。

・事例２　　1995年９月18日～10月

Ｔ子はこの時期より英語を母語とする５歳男児の遊びグループの中に入るようになる。そして、もともとＴ子の好きな

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

テレビ番組「パワーレンジャー」のイメージから戦いごっこを自ら投げかけ、激しい動きをもって遊ぶ。やがて、その遊びの輪の中には3、4歳児の（日本語を母語とする）子どもたちも入るようになる。会話はほとんど無くとも通じ合えることがT子にとっては嬉しい様子で、これまでに無かった活気のある表情を見せる。筆者は、戦いを肯定することは平和教育に反するという観点等からこの遊びを長く続けさせたくないという思いと、しかしT子の人間関係の広がりを大切にしたい思いとの狭間で悩みながら見ていた。そしてタイミングをとらえて、このなかまの遊びをリレーやドッヂボール等のルールさえ解れば共有の言葉が十分に無くとも、満足いくまで取り組める遊びへと移行させていった。

・事例3　　1995年10月22日～12月

T子は、入園後1か月半ほどの間、毎日ようにピーナッツバターサンドウイッチと生のにんじんステイックを紙袋に入れた昼食を持って来た。そのことを特別なことと気に掛けるような子どもは見られなかった　しかしT子は、数週間目より自分の昼食を何となく隠すようにして食べるようになったその後10月22日を境に、弁当箱におにぎりとおかずを入れて持って来るようになり、それと同時に昼食時の不安気な様子は見られなくなった。（母親によると、T子自ら父親に頼んでおにぎりの弁当に変えてもらったということである。）

この時期T子は、家庭からクラスの友だちの名前をひら仮名でたくさん書いた紙や日本の幼児雑誌等を毎朝のように持って来ていた。筆者には、それらの行動がT子の日本人（特に同年齢の女児）と同化したいという願いの表れのように思えていた。しかし、T子のそのような思いとは裏腹に、T子と他児との会話は成り立たず、友だち関係がうまくつくれなかった。T子は頻繁に泣くようになり、表情が暗くなり、黙りこんで英語も日本語も話さなくなっていった。筆者は、T子の心の声を確かめながら友だち関係のきっかけをつくる助けを試みたが、5歳児後期の子どもたちの日本語の会話量とT子のそれとの差があまりにも大き過ぎて結局お互いが楽しさを共有するところまで支えることができなかった。

・事例4　　1996年1月～2月

5歳児クラスでは、お店ごっこやサーカスごっこ・劇場ごっこ等が展開していた。T子は、「Ｂａｎｋをする」と言い出し、ひとりでお札をたくさん作り始めた。T子の銀行の発想に魅かれてなかまが2人、3人と増えていった。筆者は、もともとT子の絵画での表現に豊かなものと感じていたのでお札や看板にT子の絵を加えてみることをすすめた。T子が作った色々な人物の絵の書かれたお札は、本人にもそのなかまにとっても銀行を利用する子どもたちにとっても満足いく楽しいものであった。お店ごっこが展開した約1か月の間、T子は、銀行の役をし、相手により英語と日本語を使い分ける姿があった。

6.　考察

①前述の森の論文の中に『一人ひとりの子どもが、携えてきたものに対して、「見て！、聞いて！、共感して！」と声を発し、「私達の立場になって考えてみて！」と保育者に問いかけているように思えるのです。』という一項がある。このことは、どの子どもにも通じることである。とりわけT子のように、それまでの5年数か月の間、培われてきた土壌とはかなり異なる場に置かれた子どもたちの、「共感して！」という言葉にならない声は、筆者にとってはときどき叫びにも聞こえるほどのものであった。幼児のみならず、おそらくほとんどの人間は、周りに理解されたい、承認されたいという思いを持っているであろう。そしてそのことが、満たされることにより自分を安心して出していくことができると考える。筆者は、出来得る限り子どもを承認し受け止めることから、その幼児との生活を始めたいと考える。

しかしながら、T子と筆者の関わりの中だけではなく、3年間の国際学校での母語が日本語ではない子どもたちとの様々な関わりの中で、筆者が子どもとの共有の言語を十分に持っていなかったことからの理解や承認の限界があったことは否めない。二言語が行き交う保育には、両方の言葉を深く理解できる保育者の存在が重要であろう。言葉が全てではないが、言葉によって森の論じている『自己の文化のレンズ』のズレをかなり補うことができると考えられるからである。

②子どもが保育の場に携えてくるものを受け止めるのは、保育者だけで良いわけではない。「子ども同志が互いにそれぞれが違っているということを知れるよう」また、「それぞれの賜物をその子ども自身が気づけるよう」支えたい。そのことによって、子どもが相手を承認できるようになる可能性を思うからである。

③森は、同論文中、『「今日の子どもへの関わりはどのようなレンズを通してされていたのか？私の背景とどのように関係しているのか？」－中略－自分に問いかける時を持つことが大切ではないでしょうか？』と述べている。実際筆者自身3年間の保育の中で、そしてこの研究をまとめる作業の中で、自分の持つレンズの偏りや特質を認識させられ、そのことによりまた新たな課題を今抱かされている。もちろん、今回の研究のもとになった課題を追求し続けたいと思う。その上でも、自分自身の姿勢として大切にしたいことは、保育者でありながら同時に研究者であるという立場にいたいということである。子どもとの日常の関わりの中で主観的に捉えたことを自分自身で、また保育の同僚と、そして様々な分野の文献を通して、客観的にも省察していきたいと思う。そのことが、子どもや子どもをとりまくものをきちんと見ることのできる歪みの少ない、巾の広いレンズ作っていくことにつながるのではないかと思えるからである。

＜引用文献＞

1)森　眞理　保育の場に一人ひとりが携えてくるものを考える。「キリスト教保育」1996年10～11月号

＜参考文献＞

津守　真　「子どもの世界をどうみるか　行為とその意味」ＮＨＫブックス、1987年

チャールズ・テイラー　多文化・承認・ヘーゲル　「思想」岩波書店　1996年7月

NII-Electronic Library Service